

MI時代にラクスエーター・プラス

日々、予防を軸とした診療に従事しているが、日常臨床の中で感じることは、1日の仕事の中でどれだけ再治療に充てる割合が多いかということである。

つきやま歯科医院
(福岡市南区)
歯科医師 寺崎 崇人



事実、2004年 Forss らの文献によると歯科医師の1日の仕事のうち6.5割は再治療に割かれているという報告もあるくらいだ。その中でやはりいち開業医としてどうしても残せない歯は少なくはない。抜歯というと、歯科医師にとっては避けては通れない技術であり、いかに低侵襲に短時間で治療を終了するかは、その後の治療にも、患者さんとの信頼関係にも影響してくる。そんな中、このラクスエーター・プラスというインスツルメントがある時紹介された。

最初に見たときは、これまでのヘーベルよりハンドルが薄いという印象くらいしか持っていなかった。試しに使ってみても、特にこれまでのヘーベルと”持ちやすさ”以外に差を感じることは特になかった。しかし、きちんと使用方法を見ると、先端が鋭利になっているため、従来のヘーベルの回転の動きではなく、縦

の動きにより歯根膜を切っていくことで、最低限の力で抜歯を行うというコンセプトのインスツルメントであった。

次のアポイントでそれを意識して臨んでみると、驚くほど簡単にインスツルメントが歯根膜腔に滑るように入っていき、歯槽骨へのダメージもほとんどなく、ずるっと抜歯を終えることができた。最近の私の臨床では抜歯の際に常にこのインスツルメントを使用しており、なくてはならないものとなっている。

このインスツルメントはその利点からヨーロッパでは抜歯即時埋入などに積極的な使用が推奨されているという。

弘法筆を扱ばずという言葉があるが、歯科医療はその限りではない部分もあると思う。いかに最適の道具を選択しうかも歯科医師の1つのスキルである。

そんな中でこのラクスエーター・プラスを用いて、手術時間の短縮、侵襲の最小限化が可能になることは、患者および術者利益にとって大きいのではないか。MIを突き詰めた歯科医療を展開していく上で外科治療においてもやはり低侵襲な外科は非常に意義のあることだと思う。

是非多くの先生にこのラクスエーター・プラスを手にとってお使いいただきたい。一度お使い頂ければその違いに驚かされるであろう。



右下5番は残根状態



ラクスエーター・プラスを歯根膜腔にすべらせていく



くさびの効果で簡単に脱臼



最低限の組織侵襲と時間で抜歯を終了



抜去した右下5番の残根

